

「ヘイトスピーチ規制を反対する人たちのエネルギーにも適切な対応が必要では？」

平成 28 年 6 月 7 日

●熊五郎さんからの質問

ヘイトスピーチに関するお仕事お疲れ様でした。成立おめでとうございます。小生は、非道い（非倫理的）なアクションに対して大枠としてのルールを定めたのは適切だったと思います。一方で気になるのは、ポピュリズムに、はけ口を見いだす、一種のエネルギーの存在です。今回に関して言えば、相対的に犯罪率が「高いとされる」違法な滞在者、また、合法的であっても、所謂「特権」がある、反日的な言説を繰り返す人達への気持ち、何故日本人に対する「ヘイトスピーチ」は問題とされないのか、ナドナド、落ち着き感を得られないが故のイラ立ちもあるように思います。そうした彼らを是非するよりも、そのエネルギーの理由、原因を理解して、今回の法等と「同時に」、政治的に適切に対応することも大事ではないかと思います。何となれば放置すれば、そのエネルギーがトンデモナイ方向に向かう懸念があるからです（全体主義など）理不尽な批判を浴びてお疲れかとは存じますが、そういったことも併せ考えていただけたら幸いです。

●西田昌司の答え

いわゆるヘイトスピーチ解消法に対して「外国人に対するヘイトスピーチだけが許されずに、日本人に対するヘイトスピーチが許されるのはおかしい。これは日本人差別法だ」といった批判がありますが、全くそうではありません。外国人だけでなく（アイヌ人も含む）日本人へのヘイトスピーチが許されるわけがないのは当然ですし、私は国会でもそのように答弁しています。しかし、川崎や生野といった在日韓国・朝鮮人が多く住む地区において看過できないヘイトデモが繰り返されるといふ立法事実があったので、法

には「本邦外出身者」へのヘイトスピーチが許されないと謳われているわけです。

ヘイトスピーチをなんとか止めさせるよう、私たちは知恵を絞ってヘイトスピーチ解消法を成立させましたが、何故このようなヘイトスピーチが行われるようになったのか、その背景をしっかりと考えなければなりません。その一つに、いわゆる従軍慰安婦問題に対する日本国民の怒りがあるのでしょう。

いわゆる従軍慰安婦問題は、朝日新聞の捏造報道から話が大きくなって日韓の外交問題にまで発展してしまいました。かつては民主党の岡崎トミ子議員が韓国への海外視察の際（2003年）に、国会議員であるにもかかわらず元慰安婦と称する関係者が行う反日デモに参加し、日本の国旗にバツ印がついたプラカードの前でこぶしを振り上げながら反日デモを応援するという状況がありました。このような鬱屈した状況に多くの日本国民は苛立ちを感じましたし、そのように苛立つのも至極当然なことです。

岡崎トミ子議員は韓国の日本大使館前で行われたデモに参加したのですが、いわゆる従軍慰安婦問題を切り札にして日本を批判する韓国側に対して、日本側も日本にある韓国大使館の前で抗議するのは全く問題がありません。しかし、地域に溶け込んで平穏に暮らしている在日韓国・朝鮮人の集住地区に押しかけて彼らに「日本から出ていけ」といったヘイトスピーチを浴びせかけるのはそもそも政治活動ではありませんし、単なる暴力でしかないので。今回のヘイトスピーチ解消法は、そういったヘイトスピーチは許さないと宣言するものであって、韓国大使館の前で正当に抗議するといった政治活動を制限するものではありません。

戦後のGHQの占領時代、当時の政治家はGHQの命令に従って「過去の歴史はすべて間違っていた。我々は憲法で戦争を放棄して平和国家になった」と公言せざるを得ませんでした。占領中は仕方がなかったとしても、主権回復後も占領政策を見直すこともせずにそのような教育をし続けてしま

い、歴史についてのまともな議論もできないまま 70 年もの月日が経過してしまいました。このような状況を作った原因としてよく日教組が挙げられますが、日教組が悪いというよりもかつての文部省が自虐教育を推進したのであり、国を挙げて「自国の否定」をやってきたのです。自民党は昨年「歴史を学び未来を考える本部」を設置して、月に 1 度のペースでいろいろな学者を招いて話を聞き、歴史の事実をいかに国民に伝えるかを検討していますが、自民党は責任を持って戦後の欺瞞を解きほぐす努力を粘り強く続けていかなければなりません。

日本人が自らの歴史を否定するだけでなく、いわゆる従軍慰安婦問題といった事実無根の話をでっち上げられて外国からも貶められるといった具合に戦後の日本人は内外から言われ放題であり、戦後の矛盾に気付いた人にとっては鬱屈した感情を覚えるのでしょうし、それももったもったなことだと思います。しかし、そういった怒りの矛先を何の関係もない在日韓国・朝鮮人に向けるのは筋違いというものです。

昭和の時代は毎年経済が成長して豊かさを実感できる時代でした。戦後の矛盾があったとしてもそれには目をつぶればまあ普通に楽しく生きられたのですが、平成の時代になってからバブルがはじけて長年に渡るデフレに突入し、格差が広がって豊かさを実感できない人を大量に出してしまいました。そのような人々の鬱屈した気持ちが（自分よりも恵まれていると思われる人々を憎悪したり、復讐の衝動にかられるといった）ルサンチマンを抱えさせることになってしまい、目の前の在日韓国・朝鮮人が自分よりも裕福な暮らしをしているとなると怒りの矛先がそちらに向かってしまうわけです。

アメリカの大統領選でトランプ候補が多くの人に支持されているのも、ルサンチマンを抱える大衆といった視点で眺めると理解もできようものです。かつてアメリカは世界の警察官を自認する超大国でしたが、今では国力がどんどん低下して超格差社会となり不満を持つ人々で溢れています。そういった人々が、トランプ候補のヘイトスピーチにも通底する発言を耳にするとある種のプライドが満たされるのでしょう。大量の移民を受け入れたドイツで

も外国人を排斥するネオナチといった集団が台頭しています。世界各地でいろいろな問題がありますが、怒りの矛先が外国人に向けられるというのは世界に共通する悲しい現実であります。

安倍内閣がデフレ脱却に向けて舵を切ったことはヘイトスピーチ解消に取っても大事だと思いますし、ヘイトスピーチをする彼らの不満の原因となっているところを政治の力で解消していかなければなりません。

反訳：ウッキーさん

Copyright：週刊西田 <http://www.shukannishida.jp>